

看護学生の短大生活への適応に関する調査 — 入学志望度と満足度, イメージの変化による一考察 —

南 口 佳寿江*¹ 吉 田 正 子*¹

Research on nursing students' adaptation to college life

— A study based on students' choice of and entrance to college, the extent of satisfaction after entering college, and image changes —

Kazue NANKO, Masako YOSIDA

Abstract

Occasions arise when nursing students experience frustration due to difficulties in various phases of their college life, such as learning, practical training and relationship with friends. It is desirable to educate students along with a proper understanding of their mental health. They are apt to face discord and be mentally restless, since they are still in the process of growth.

In order to grasp the actual conditions of students in our college, a survey was conducted on the state of their adaptation to college life six months after their entrance into college. This survey included: (1) why students chose and entered this college, (2) whether students are now satisfied with college life, and (3) whether students have changed their image of college life — the one that they had before and just after entering this college.

About 25% of respondents said, "I am satisfied", and the students of this group showed only a slight change in their image of college life. On the other hand, about 30% said, "I am not satisfied", and these students showed great change in their image of college life. Also it turned out that the students of the latter group once wished to learn subjects other than nursing or to learn nursing at other universities or colleges.

The changes mentioned by students include images becoming gloomy, hard, narrow, cramped, laborious, busy, and demanding. These images indicate that students are tense and depressed, and also that they are strongly frustrated after experiencing the first six months of college life and having undergone the final examinations of the first semester.

Key Words : nursing students, college life, adaptation, image, extent of satisfaction

看護学生, 短大生活, 適応, イメージ, 満足度,

緒 言

エリクソンは、青年期の発達課題をアイデンティティの形成としている¹⁾。丁度、この時期に学生は自己の将来像を描きながら、学力との間で大学を決定、受験し、入学する。そして、短期大学（以下短大と略す）に入った者は、その短大生活の中で様々なことに出会い、葛藤や精神的動揺をきたしながらも、短大という環境にそれぞれのレベルで適応し²⁾、社会における自

己の役割をみつけていくものと考えられる。

本学の看護学生は、一応職業選択を終えているが、中には未だ迷っている者もあり適応過程に影響を及ぼすと考えられる。また、適応のレベルが低いために迷いが生じてくる学生もあり、これらの学生の中には、途中で挫折に至る場合もある。

本学は、1995年4月に開学し、教職員の赴任も大学組織やその運営等も、すべてが同時に始

* 1 看護学科
Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

まり、その直後より入学式、そして開講となった。従って、学生の受け入れ体制は十分とはいえない。そのような中で学生の適応はどのような状況であろうか。学生が主体的に学習に取り組めるために、学生の精神面の健康を把握した教育的配慮が必要であり、学生の適応状況によっては、それに対応していく必要があると考える。

私達は適応を「一般に人の適応というときは社会的適応をさし、人が適応した状態にあることを別の視点でみると、それは自分の能力や適性を十分に発揮して、その結果本人が満足している状態をさしている。いわゆる自己実現している状態³⁾」と捉えた。

そこでこの概念を基に満足度、入学の志望度、対人関係、学習状況、学生生活、入学前および入学後6ヵ月の短大生活に対するイメージの変化の項目から適応状況をみようと本学の看護学生に対して、入学後6ヵ月の時点で適応に関する実態を調査した。今回は、現在の満足度、入学前および入学後6ヵ月の短大生活に対するイメージの変化、入学の志望度について考察を加えて報告する。

調査目的

本学入学後6ヵ月を経過した時点の学生の短大生活への適応状況を明らかにし、学生の精神面への健康に対する教育的配慮について提言する。ただし今回は、現状と今後の課題を把握する。

調査方法

1. 調査対象

平成7年度4月、本学看護学科に入学した第一期生の学生97名。

2. 調査時期と方法

調査は、平成7年10月4日に集合調査とし、質問紙により学籍番号記入で行った。

3. 調査内容

①満足度の測定（5項目）

対象者が、短大生活にどの程度満足しているかを、本学入学に関する事、現在の短大生活に関する事、今後の意欲について質問項目を設定した。回答は「強く感じる」「まあ感じる」「普通」「あまり感じない」「全く感じない」の5段階評定とした。

②短大生活イメージの測定

イメージを測定する方法として、岩下⁴⁾が推進する比較的一般化された意味微分法（semantic differential technique：以下SD法と略す）を用いた。まず短大生活へのイメージを測定する形容詞対尺度を構成するため予備調

査を行った。予備調査では、本学看護学科一年生20名を対象に、刺激語「短大生活」を提示し、連想語を収集する自由連想法を行った。自由連想法で得られた形容詞の反対語を選定し、25項目の形容詞対を決定した。形容詞対の配列方法は、配列順序を無作為にし、また、肯定的か否定的かの回答態度が機械的になることを避けるために、半数の項目は、左右を逆転させた。

教示の仕方は、入学前のイメージについては「あなたがこの短大入学前にもっていた短大生活へのイメージについて当てはまる箇所に○印をつけて下さい」とし、現在のイメージについては「あなたがこの短大に入学し6ヵ月たった現在の短大生活へのイメージについて当てはまる箇所に○印をつけて下さい」とした。ここで短大入学前については、その時期を規定していない。

さらに、入学前と現在のどちらを先にイメージするかで、得られた結果に影響があることを考慮し、入学前のイメージを先に質問する集団と現在のイメージを先に質問する集団が対象者の半数ずつになるようにした。

回答は「非常によく当てはまる」「かなりよく当てはまる」「やや当てはまる」「同じくらい当てはまる又は全く当てはまらない」の7段階評定とした。

③入学志望度の調査

対象者が本学入学をどの程度希望していたのか、質問項目を設定した。

回答は「どうしても本短大に入学したいと思っていた」「できれば本短大に入学したいと思っていた」「他大学又は他短大への入学も考えていた」「できれば他大学又は他短大に入学したいと思っていた」の4段階評定とした。

4. 評価方法

①満足度

満足度の得点化は、各項目とも「強く感じる」から「全く感じない」へ1点から5点の得点を与え、得点が低いほど満足度が高くなるようにした。5項目の総合得点を平均化し個人の満足度の高さをみていく。得点化した理由は、森田ら⁵⁾中野ら⁶⁾の研究を参考に、項目が5項目あるため満足度に差があり、全体の満足度をだすためには平均化する必要があったためである。

②短大生活イメージ

イメージの尺度の得点化は、各項目とも尺度目盛の中心を基点とし左方向へ-1,-2,-3,右方向へ+1,+2,+3とした。

結 果

質問紙の回収率は、100%であった。

表1 短大生活に対する満足度

| | (単位 人) | | | | | 全体 |
|----------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-----------|--------------|
| | 強く感じる | まあ感じる | 普通 | あまり感じない | 全く感じない | |
| この短大に入学してよかった | 9 9.3% | 30 30.9% | 38 39.2% | 18 18.6% | 2 2.1% | 97 100.0% |
| 本短大の学生であることに誇りをもっている | 8 8.3% | 33 34.0% | 42 43.3% | 12 12.4% | 2 2.1% | 97 100.0% |
| 現在の短大生活は面白い | 6 6.2% | 16 16.5% | 38 39.2% | 35 36.1% | 2 2.1% | 97 100.0% |
| 現在の学習に満足している | 3 3.1% | 13 13.4% | 32 33.0% | 41 42.3% | 8 8.3% | 97 100.0% |
| 今後もこの短大でがんばりたい | 24 24.7% | 44 45.4% | 26 26.8% | 3 3.1% | 0 0.0% | 97 100.0% |

表2 満足度尺度の内部相関と合計得点-項目得点間の相関

| 項目 | (N=97) | | | | | |
|-------------------------|--------|------|------|------|------|-----|
| | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) |
| (1)この短大に入学してよかった | 1 | | | | | |
| (2)本短大の学生であることに誇りをもっている | 0.76 | 1 | | | | |
| (3)現在の短大生活は面白い | 0.58 | 0.52 | 1 | | | |
| (4)現在の学習に満足している | 0.32 | 0.25 | 0.36 | 1 | | |
| (5)今後もこの短大でがんばりたい | 0.58 | 0.55 | 0.47 | 0.17 | 1 | |
| (6)満足度合計 | 0.86 | 0.82 | 0.78 | 0.57 | 0.72 | 1 |

1. 短大生活に対する満足度

学生の現在の短大生活に対する満足度の結果を表1に示す。

もっとも満足強く感じると回答した項目は、「今後もこの短大でがんばりたい」で24.7%、それ以外の項目は10%に満たない。また、満足全く感じないと回答した項目は、「現在の学習に満足している」が8.3%で、それ以外は2%程度であるので、「強く感じる」と「まあ感じる」をあわせて「感じる」とし、「あまり感じない」と「全く感じない」をあわせて「感じない」として試みていくこととする。

「この短大に入学してよかった」は、「感じる」と回答した者が40.2%で、本短大入学を肯定的に捉えている。しかし、20.7%の者が「感じない」と回答した。

「本短大の学生であることに誇りをもっている」は、42.3%の者が「もっている」と回答し、自分の短大に誇りをもっているが、14.5%の者が「もっていない」と回答した。

「現在の短大生活は面白い」は、「感じる」と回答した者が22.7%、「感じない」と回答した者は38.2%にのぼり、肯定的に捉えている者より多い。

「現在の学習に満足している」は「感じる」と回答した者が16.5%、「感じない」と回答した者は50%を超えている。

「今後もこの短大でがんばりたい」は、「感じる」と回答した者が70.1%で、「感じない」と答えた者は3.1%であった。

満足度尺度の各項目得点間の相関、満足度合計得点と各項目得点間の相関を表2に示す。

各項目間の相関をみると、「この短大に入学してよかった」「本短大の学生であることに誇りをもっている」の項目において高い相関を示す。

「現在の学習状況に満足している」「今後もこの短大で頑張りたい」の項目における相関は低い。

合計得点と各項目得点間の相関をみると、「現在の学習状況に満足している」以外の項目において高い相関を示した。

2. 短大生活に対するイメージ

学生の入学前と現在の短大生活に対するイメージの平均値の差を図1に示す。

入学前と現在のイメージを比較すると差の平

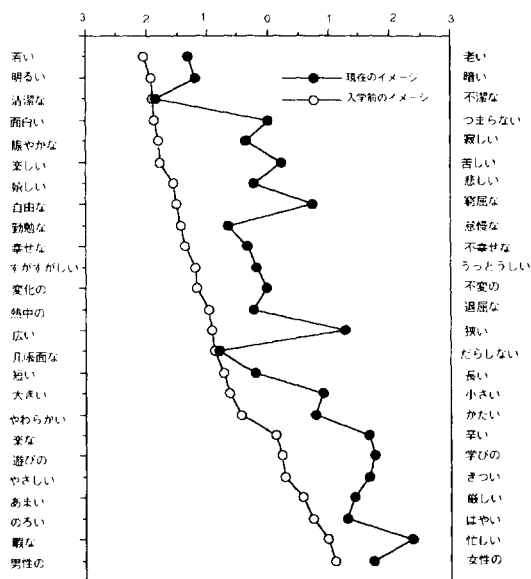


図1 入学前と現在の短大生活に対するイメージ

均は1.1であった。1.5以上の差がみられた項目は、7項目で「面白い-つまらない」「楽しい-苦しい」「自由な-窮屈な」「広い-狭い」「大きい-小さい」「楽な-辛い」「遊びの-学びの」であった。1.0以上の差がみられた項目は、8項目で「賑やかな-寂しい」「嬉しい-悲しい」「幸せな-不幸せな」「すがすがしい-うっとうしい」「変化の-不変の」「やわらかい-かたい」「やさしい-きつい」「暇な-忙しい」であった。さらにt検定を行い、1.0以上の差のある項目で「すがすがしい-うっとうしい」「幸せな-不幸せな」を除く全ての項目において0.1%水準で有意差が認められた。

現在のイメージは「つまらない」「苦しい」「窮屈な」「狭い」「小さい」「辛い」「学びの」「寂しい」「悲しい」「不変の」「かたい」「きつい」「忙しい」の方向へ変化している。「清潔な-不潔な」「几帳面な-だらしない」の項目においてのイメージの差は0.5以下と小さかった。

3. 満足度とイメージの差との関係

満足度とイメージの差の関係をみるために、満足度の平均値±標準偏差を基準として、学生を3グループに分類した。また学生の入学前と現在のイメージの差を合計し平均値±標準偏差を基準として、学生を3群に分類し、あわせたものを表3に示す。

最も集中しているのは、中満足度グループの差の中程度群であり約20%を占める。次いで、

表3 満足度とイメージの差による分類 (単位 人)

| | 計 | 低満足度グループ | 中満足度グループ | 高満足度グループ |
|--------|----|-------------|-------------|-------------|
| 計 | 97 | 32 | 39 | 26 |
| 差の大きい群 | 28 | 16 16.5% | 8 8.2% | 4 4.1% |
| 差の中程度群 | 38 | 8 8.2% | 19 19.6% | 11 11.3% |
| 差の小さい群 | 31 | 8 8.2% | 12 12.4% | 11 11.3% |

低満足度グループの差の大きい群がやや多く、中程度群と小さい群をあわせた数と同数である。逆に、最も少ないのは高満足度グループの差の大きい群で、このグループは差の中程度群と小さい群がそれぞれ大きい群の2倍以上であった。

次に各グループに属する学生の入学前と現在のイメージの差についてt検定を行い、結果を表4に示す。

(1)低満足度グループ

①イメージ差の大きい群

3.5以上の差がみられた項目は、4項目で「面白い-つまらない」「楽しい-苦しい」「自由な-窮屈な」「広い-狭い」であった。2.5以上の差がみられた項目は、8項目で「賑やかな-寂しい」「嬉しい-悲しい」「幸せな-不幸せな」「すがすがしい-うっとうしい」「変化の-不変の」「大きい-小さい」「やわらかい-かたい」「遊びの-学びの」であった。これら12項目と1.6以上の差のある6項目「若い-古い」「明るい-暗

表4 満足度別入学前と現在のイメージの差

| | 低満足度グループ | | | 中満足度グループ | | | 高満足度グループ | | |
|---------------|--------------|--------|--------|--------------|---------|---------|--------------|--------|--------|
| | t検定 (入学前:現在) | | | t検定 (入学前:現在) | | | t検定 (入学前:現在) | | |
| | 差の大きい群 | 差の中程度群 | 差の小さい群 | 差の大きい群 | 差の中程度群 | 差の小さい群 | 差の大きい群 | 差の中程度群 | 差の小さい群 |
| 若い-古い | 1.62*** | 0.63 | 0.25 | 0.38 | 0.89 | 0.58 | 1.80 | 0.36 | 0.18 |
| 明るい-暗い | 2.31*** | 0.88 | 0.25 | 1.00 | 0.74 | 0.08 | 1.30 | 0.00 | 0.27 |
| 清潔な-不潔な | 0.13 | 0.00 | 0.38 | 0.25 | 0.11 | 0.42 | 0.00 | 0.00 | 0.00 |
| 面白い-つまらない | 3.69*** | 2.00* | 1.38** | 2.25* | 2.53*** | 0.67 | 2.50 | 0.91 | 0.09 |
| 賑やかな-寂しい | 3.38*** | 1.50* | 0.88 | 1.25* | 1.47*** | 0.08 | 2.25 | 0.82 | 0.73 |
| 楽しい-苦しい | 4.00*** | 2.13** | 0.88 | 2.75*** | 2.95*** | 0.75 | 3.50* | 0.18 | 0.64 |
| 嬉しい-悲しい | 2.69*** | 1.00 | 0.25 | 2.00** | 1.32*** | 0.92*** | 2.00 | 0.91 | 0.55 |
| 自由な-窮屈な | 3.94*** | 2.50* | 1.13* | 3.00** | 2.79*** | 0.50 | 3.25 | 1.73* | 0.91* |
| 勤勉な-怠慢な | 0.75 | 0.13 | 1.75** | 1.88** | 0.68 | 0.92 | 2.25 | 1.00 | 0.91 |
| 幸せな-不幸せな | 2.50*** | 0.63 | 0.50 | 1.38** | 1.37*** | 0.17 | 1.30 | 0.55 | 0.00 |
| すがすがしい-うっとうしい | 2.50*** | 1.00 | 0.25 | 1.25 | 0.79 | 0.42 | 1.75 | 0.73 | 0.27 |
| 変化の-不変の | 2.63*** | 0.78 | 0.38 | 2.13* | 0.84 | 0.33 | 1.30 | 1.82* | 0.27 |
| 熱中の一退屈な | 1.75*** | 0.75 | 0.88 | 1.88** | 0.32 | 0.00 | 0.85 | 0.91 | 0.27 |
| 広い-狭い | 3.50*** | 2.50** | 0.63 | 3.88*** | 2.42*** | 1.08* | 4.00 | 1.73* | 0.73 |
| 几帳面な-だらしない | 0.19 | 0.25 | 0.38 | 0.50 | 0.11 | 0.25 | 0.50 | 0.64 | 0.73 |
| 短い-長い | 0.88 | 0.75 | 0.63 | 1.38 | 0.58 | 0.17 | 0.50 | 0.18 | 0.45 |
| 大きい-小さい | 2.69*** | 1.38 | 0.00 | 3.88** | 1.79*** | 0.58 | 2.50 | 0.73 | 0.36 |
| やわらかい-かたい | 2.56*** | 1.13 | 0.00 | 1.75* | 1.37*** | 0.17 | 3.75 | 0.27 | 0.82 |
| 楽な-辛い | 2.31*** | 1.75** | 0.75 | 2.00* | 1.84*** | 0.83 | 3.75* | 1.00 | 0.45 |
| 遊びの-学びの | 3.06*** | 1.75** | 0.38 | 2.00** | 1.53*** | 0.17 | 2.30 | 1.73** | 0.82 |
| やさしい-きつい | 1.81*** | 1.25* | 0.50 | 2.13** | 1.68*** | 0.33 | 4.5** | 1.64* | 0.18 |
| あまい-酸っぱい | 1.75** | 1.00 | 0.38 | 1.13 | 0.95 | 0.25 | 4.0* | 0.27 | 0.27 |
| のろい-はやい | 0.69 | 0.50 | 0.25 | 1.88** | 0.68 | 0.33 | 1.25 | 0.91 | 0.18 |
| 暇な-忙しい | 2.19*** | 1.50 | 0.13 | 1.38 | 1.74** | 0.75 | 3.05 | 1.45* | 0.55 |
| 男性の-女性の | 0.88 | 0.13 | 0.50 | 2.25*** | 0.58 | 0.25 | 2.25* | 0.45 | 0.27 |

***p<.001, **p<.01, *p<.05

い「熱中の－退屈な」「楽な－辛い」「やさしい－きつい」「暇な－忙しい」において、t検定では0.1%水準で有意差を認めた。なお、「あまい－厳しい」は、1%水準で有意差を認めた。

現在のイメージは「つまらない」「苦しい」「窮屈な」「狭い」「寂しい」「悲しい」「不幸せな」「うっとろしい」「不変の」「小さい」「かたい」「学びの」「古い」「暗い」「退屈な」「辛い」「きつい」「忙しい」「厳しい」の方向へ変化している。

「清潔な－不潔な」「几帳面な－だらしない」の項目においての差は0.5以下であった。

②イメージ差の中程度群

2.0以上の差がみられた項目は、4項目で「面白い－つまらない」「楽しい－苦しい」「自由な－窮屈な」「広い－狭い」であった。1.1以上の差がみられた項目は、5項目で「賑やかな－寂しい」「楽な－辛い」「遊びの－学びの」「やさしい－きつい」「暇な－忙しい」であった。これら9項目のうち、4項目、すなわち「楽しい－苦しい」「広い－狭い」「楽な－辛い」「遊びの－学びの」は、t検定では1%水準で有意差を認めた。また、「面白い－つまらない」「賑やかな－寂しい」「自由な－窮屈な」「やさしい－きつい」の4項目は、5%水準で有意差を認めた。「暇な－忙しい」は、有意差を認めなかった。イメージ差の大きい群と比較すると、その有意差は低い。

現在のイメージは「つまらない」「苦しい」「窮屈な」「狭い」「寂しい」「辛い」「学びの」「きつい」の方向へ変化している。

「清潔な－不潔な」「勤勉な－怠慢な」「几帳面な－だらしない」「のろい－はやい」「男性の－女性の」の項目における差は0.5以下であった。

③イメージ差の小さい群

1.1以上の差がみられた項目は「面白い－つまらない」「自由な－窮屈な」「勤勉な－怠慢な」の3項目のみであった。「面白い－つまらない」「勤勉な－怠慢な」は1%水準、「自由な－窮屈な」は5%水準で有意差を認めた。

現在のイメージは「つまらない」「窮屈な」「怠慢な」の方向へ変化している。

「大きい－小さい」「やわらかい－かたい」の項目における差は0であった。

(2)中満足度グループ

①イメージ差の大きい群

3.5以上の差がみられた項目は、2項目で「広い－狭い」「大きい－小さい」であった。2.5以上の差がみられた項目は、2項目で「楽しい－苦しい」「自由な－窮屈な」であった。t検定を行い0.1%水準で有意差を認めた項目は「楽しい－苦しい」「広い－狭い」「男性の－女性の」の3項目であり、1%水準で有意差を認めた項目は、9項目で「嬉しい－悲しい」「自由な－窮屈な」「勤勉な－怠慢な」「幸せな－不幸せな」

「熱中の－退屈な」「大きい－小さい」「遊びの－学びの」「やさしい－きつい」「のろい－はやい」であった。また5%水準で有意差を認めた項目は、5項目で「面白い－つまらない」「賑やかな－寂しい」「変化の－不変の」「やわらかい－かたい」「楽な－辛い」であり、有意差のある項目が多い。

現在のイメージは「苦しい」「狭い」「女性の」「悲しい」「窮屈な」「怠慢な」「不幸せな」「退屈な」「小さい」「学びの」「きつい」「はやい」「つまらない」「寂しい」「不変の」「かたい」「辛い」の方向へ変化している。

「若い－古い」「清潔な－不潔な」「几帳面な－だらしない」の項目における差は0.5以下であった。

②イメージ差の中程度群

2.0以上の差がみられた項目は、4項目で「面白い－つまらない」「楽しい－苦しい」「自由な－窮屈な」「広い－狭い」であった。1.1以上の差がみられた項目は、9項目で「賑やかな－寂しい」「嬉しい－悲しい」「幸せな－不幸せな」「大きい－小さい」「やわらかい－かたい」「楽な－辛い」「遊びの－学びの」「やさしい－きつい」「暇な－忙しい」であった。これら13項目のうち「暇な－忙しい」は、t検定では1%水準で有意差を認め、他12項目においては0.1%水準で有意差を認めた。

現在のイメージは「つまらない」「苦しい」「窮屈な」「狭い」「寂しい」「悲しい」「不幸せな」「小さい」「かたい」「辛い」「学びの」「きつい」「忙しい」の方向へ変化している。「清潔な－不潔な」「熱中の－退屈な」「几帳面な－だらしない」の項目における差は0.5以下であった。

③イメージ差の小さい群

1.1以上の差のある項目はなかった。0.9以上の差は「嬉しい－悲しい」「勤勉な－怠慢な」「広い－狭い」の3項目であった。t検定では「嬉しい－悲しい」は、0.1%水準で有意差を認め、「広い－狭い」は、5%水準で有意差を認めた。

現在のイメージは「悲しい」「狭い」の方向へ変化している。

「熱中の－退屈な」の項目における差は0であった。

(3)高満足度グループ

①イメージ差の大きい群

3.5以上の差がみられた項目は、6項目で「楽しい－苦しい」「広い－狭い」「やわらかい－かたい」「楽な－辛い」「やさしい－きつい」「あまい－厳しい」であった。2.5以上の差がみられた項目は、4項目で「面白い－つまらない」「自由な－窮屈な」「大きい－小さい」「暇な－忙しい」であった。t検定では1%水準で有意差を認めたのは「やさしい－きつい」の項目であり、5%水準で有意差を認めた項目は、「楽しい－苦し

い」「楽な-辛い」「あまい-厳しい」「男性の-女性の」の4項目であった。

現在のイメージは「きつい」「苦しい」「辛い」「厳しい」「女性の」の方向へ変化している。「清潔な-不潔な」「几帳面な-だらしない」「短い-長い」の項目においての差は0.5以下であった。

②イメージ差の中程度群

1.5以上の差がみられた項目は、5項目で「自由な-窮屈な」「変化の-不変の」「広い-狭い」「遊びの-学びの」「やさしい-きつい」であった。1.1以上の差がみられた項目は「暇な-忙しい」であった。これら6項目のうち「遊びの-学びの」は、t検定で1%水準の有意差を認め、他の5項目においては5%水準で有意差を認めた。

現在のイメージは、「学びの」「窮屈な」「不変の」「狭い」「きつい」「忙しい」の方向へ変化している。

0.5以下の差の項目は「若い-古い」「明るい-暗い」「清潔な-不潔な」「楽しい-苦しい」「短い-長い」「やわらかい-かたい」「あまい-厳しい」であった。

③イメージ差の小さい群

1.1以上の差のある項目はなかった。0.9以上の差がみられた項目は「自由な-窮屈な」「勤勉な-怠慢な」の2項目のみであった。t検定で5%水準の有意差を認めたのは「自由な-窮屈な」であった。

現在のイメージは、「窮屈な」の方向へ変化している。

「清潔な-不潔な」「幸せな-不幸せな」の項目においての差は、0であった。

4. 入学志望と満足度グループの関係

入学志望と満足度グループの関係について、結果を表5に示す。

「どうしても本学に入学したいと思っていた」学生は7.2%であり、その殆どは高満足度グループであった。「できれば本学に入学したいと思っていた」学生は16.5%で、本学入学を強く志望していた学生とあわせると23.7%である。そし

て、「できれば本学に入学したいと思っていた」学生の殆どは中満足度グループであった。「他大学又は他短大への入学も考えていた」学生は、45.4%と多く、各グループに分散していた。「できれば他大学又は他短大に入学したいと思っていた」学生は29.9%で、その半数が低満足度グループであり、次いで、中満足度グループ、高満足度グループの順に少なくなっている。

考 察

1. 満足度に見る適応状況

本学に入学してよかったと強く満足を感じる学生は、1割未満で、3割の学生がまあ満足していると答えていることから、4割の学生が満足している。一方、あまり満足していない学生も2割存在している。しかし、意欲をもてない学生が極く少数であり、殆どの学生が意欲をもっていることは、今後の適応状況に影響してくるものと考えられる。ただし、その影響因子としての短大生活の内容の満足度は低いので、今後の短大生活の在り方によっては学生の満足度は、高くも低くもなると考えられる。そこで、特に満足度の低い学習に関する配慮が必要であり、また、短大生活の内容を具体的にみていく必要もあると考えられる。

2. イメージの変化でみた適応状況

イメージの変化で適応状況をみると、入学前では、短大生活に対し学生の情緒的側面である「若い」「明るい」「面白い」「賑やかな」「楽しい」「嬉しい」「幸せな」「すがすがしい」等の項目は、肯定的なイメージであった。また、活動面としての「自由な」「変化の」「熱中の」という項目も肯定的イメージをもっており、短大に入学すれば何かができるような希望を抱いていたことがわかる。「短い」「はやい」「女性の」は、いわゆる短大のイメージと考えられ、「勤勉な」「几帳面な」「厳しい」「忙しい」は、短大の短い期間の中で行う学習面の緊張に繋がるイメージであると考えられる。その他「清潔な」「広い」

表5 満足度別入学志望度

(単位:人)

| | 全体 | 低満足度グループ | | | 中満足度グループ | | | 高満足度グループ | | | | | |
|--------------------------|-------------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|
| | | 合計 | 小計 | 差 | 小計 | 差 | 小計 | 差 | | | | | |
| 本短大入学について | | | | | | | | | | | | | |
| どうしても本短大に入学したいと思っていた | 7 7.2% | 1 1.0% | 0 0.0% | 0 0.0% | 1 1.0% | 1 1.0% | 0 0.0% | 0 0.0% | 5 5.2% | 2 2.1% | 2 2.1% | 1 1.0% | |
| できれば本短大に入学したいと思っていた | 16 16.5% | 3 3.1% | 2 2.1% | 0 0.0% | 1 1.0% | 11 11.3% | 3 3.1% | 4 4.1% | 4 4.1% | 2 2.1% | 0 0.0% | 2 2.1% | |
| 他大学又は他短大への入学も考えていた | 44 45.4% | 13 13.4% | 7 7.2% | 4 4.1% | 2 2.1% | 17 17.5% | 3 3.1% | 10 10.3% | 4 4.1% | 14 14.4% | 1 1.0% | 8 8.2% | 5 5.2% |
| できれば他大学又は他短大に入学したいと思っていた | 29 29.9% | 15 15.5% | 7 7.2% | 4 4.1% | 4 4.1% | 9 9.3% | 1 1.0% | 4 4.1% | 4 4.1% | 5 5.2% | 1 1.0% | 1 1.0% | 3 3.1% |
| 無回答 | 1 1.0% | 0 0.0% | 0 0.0% | 0 0.0% | 0 0.0% | 1 1.0% | 0 0.0% | 1 1.0% | 0 0.0% | 0 0.0% | 0 0.0% | 0 0.0% | |
| 計 | 97 | 32 | 16 | 8 | 8 | 39 | 8 | 19 | 12 | 26 | 4 | 11 | 11 |

「大きい」の3項目は、本学の外観から感じたものであろう。

これらのことから入学前の学生は、受験戦争による抑圧から解放され、気分が高揚し、新しい環境に対し期待と希望のイメージをもっているものの、短大生活に対し「楽な」「やさしい」「あまい」というイメージはもたず、現実を「厳しい」「忙しい」ものであると捉えている。

現在のイメージが、情緒面で「つまらない」「寂しい」「悲しい」「苦しい」等の方向へ変化し、活動面においても「窮屈な」「不変の」「退屈な」の方向へと変化しているのは、短大の過密なカリキュラムや試験、レポートといった多くの課題が、圧迫感となっているためであろう。また集中講義、実習等で他学科に比して約3週間夏休みが短くなっていたことが影響しているとも推察できる。一方「勤勉な」から「怠慢な」へイメージは変化しており、これらの矛盾が学生の葛藤を表わしていると考えられる。そのような中でも7割の学生が意欲をもっており、この意欲をより高いレベルの適応に向けてつないでいくことが今後の課題であるといえる。

なおイメージを測定する形容詞対の選定については、一応妥当性があると考えた細見ら⁷⁾のイメージに関する研究の尺度構成を参考にしたが調査結果からみて、やや偏りのある項目もあり、この部分については今後再考を要する。

3. 満足度とイメージの変化及び志望度からみた適応状況

満足度を低満足度グループ、中満足度グループ、高満足度グループに分けてイメージの変化から適応状況をみていくと、低満足度グループにイメージの差の大きい者が多く、高満足度グループにいくに従って、差が小さくなり、イメージの差の大きさが、満足度に影響を及ぼしていることがわかる。

また、もともと本学を志望した者は約2割であったが、結果として入学してよかったとする者が約4割であることは、比較的適応状況は良いと考えられる。そのなかで高満足度グループに本学を強く志望した者が集まり、低満足度グループに大学を含む他学を志望した者や、本学でもどちらでもいいと考えていた者が多いのは、まだ入学6ヵ月ということから当然であるといえるであろう。

(1)低満足度グループの適応状況

イメージの差の大きい群では、有意差を認めなかった項目は、「清潔な」「勤勉な」「几帳面な」「短い」「はやい」「男性の」であって、特に入学前から緊張を要求されるものである。その他の情緒面や活動面は、全て否定的なイメージに傾いており、また、この群の本学への志望度を

見ると、殆どの学生が「他大学又は他短大への入学も考えていた」「できれば他大学又は他短大に入学したいと思っていた」と答えていることから、不本意な入学による不満と入学前の希望や期待とは異なった短大生活は、強い葛藤となり適応を阻むものと考えられる。しかし、希望がもてるようになれば満足度は上がる可能性があるため、情緒面や活動面に対する教育的配慮が必要であるといえる。

イメージの差の中程度群について、差は中程度であっても、t検定で5%以上の水準の有意差をもって「つまらない」「寂しい」「苦しい」「窮屈な」「狭い」「辛い」「学びの」「きつい」の方向に変化しているということは、学生にとって圧迫感となり、葛藤しているものと考えられる。

イメージ差の小さい群では、t検定で5%水準以上の有意差の項目が3項目で「つまらない」「窮屈な」「怠慢な」の方向へ変化している。そのうえ、この群の本学への入学志望度をみると「できれば他大学又は他短大に入学したいと思っていた」と答えた者が最も多い。これらのことは本学が志望校ではなく、大学を志望していたことも考えられ、初めから希望や期待をもてなかった可能性もあり、イメージの差の大きい群以上に葛藤があるものと考えられる。それ故、この学生達については、他の調査資料ともあわせて考察したい。

(2)中満足度グループの適応状況

イメージの差の大きい群も中程度群もともに、t検定で有意差のある項目が半数以上を占めるが、満足度が中程度ということは、短大生活をそれなりに満足していると考えられる。また、イメージの差の小さい群においても「嬉しい」「広い」は有意の差で否定的に変化しているものの、同様にそれなりに満足している。

志望校については本学を志望した者は比較的多く、本学の全志望者の半数を占めている。また、イメージの差の中程度群に他大学への志望も考えた者がやや集中している他は、イメージの差の大中小の各々の群の差はみられない。上記、他大学への志望も考えたということは本学への志望も含まれており、満足しやすいと考えられる。しかし、イメージの差が大きいということは葛藤がないとはいえない。

(3)高満足度グループの適応状況

t検定で有意差を認めた「苦しい」「窮屈な」「狭い」「辛い」「学びの」「きつい」「厳しい」「忙しい」「男性の」の項目が全て緊張の方向へ変化していることから、低満足度グループ、中満足度グループと同様の傾向はみられるが、有意差のあるものは少なく、その満足度からみて適応しているものと考えられる。

志望校については、本学を強く志望している者が集まっている。また、他大学への志望も考えた者が多いが、先述と同様に本学への志望も含まれており、動機づけが関与しているものと考えられる。

また、このグループと中満足度グループをあわせて1.5割の学生ができれば他大学を志望していたにもかかわらず、現状を受け止めたり高い満足度であることは、不本意な入学であっても適応していることが考えられ、このような変化は教育的配慮によって促進されるものとする。

これまで述べてきたように、高い満足度で適応している学生もいるが、それなりに満足しているレベルや葛藤している学生が多いことから、現在の短大生活に対して何らかの教育的配慮が必要であるとする。そして、教育的配慮については、学習の在り方、また、「苦しい」「窮屈な」「狭い」「きつい」「忙しい」に対しカリキュラムや学生生活の自由性について、その内容を具体的に把握し対応していかなければならない。一方、「苦しい」「忙しい」等も現在の適応過程のなかでは当然起こってくることであり、教育的配慮の必要性がどこまであるのかを判断するために、今後の適応の状況を継続的にみていくことも必要であり、この2点が今後の課題となる。

また、本調査については、夏休み後、すぐに基礎看護学実習が実施され、引き続いて前期定期試験が行われた。その後調査したのでイメージが「きつい」を誇張する結果になったことも考えられ、今後は実施時期を考慮したい。

結 論

1. 本学への入学をよかったと感じている者が約4割で、よかったとあまり感じていない者が2割である。しかし、短大生活に対しては、約2割が満足であり、満足していない者が約4割とその比率は逆転し、学習においては、さらに満足していない者が全体の半数を占める。ただし殆どの者が、今後も頑張りたいと意欲を示している。

2. 短大生活に対するイメージは、入学前には情緒的な側面、活動的な側面ともに殆どの項目において肯定的なイメージである。また、学習面のイメージは、短大というイメージと相まって緊張感を表わしていた。現在のイメージでは、情緒面、活動面が、否定的な方向へ変化している。

3. 入学前と現在のイメージの差は、大きいもの程満足度は低く、志望校も他大学又は他短大の者が多い。もともと本学を志望した者は2割であったが、入学してよかったと感じる者が4割であり、特に本学を志望していなくても2

割の者は満足している。また、高満足度グループに本学を強く志望している者が多く、低満足度グループに他大学又は他短大を志望した者が多い。

引用文献

- 1) 空井健三, 佐藤修策他: 臨床心理学大系 第10巻 適応障害の心理臨床, 金子書房, 74-75, 1992
- 2) レッドマン: ストレス・対処・適応 新臨床看護学体系 I. 医学書院, 179, 1974
- 3) 細谷俊夫, 奥田真丈他: 新教育学大辞典. 第一法規, 239, 1990
- 4) 岩下豊彦: SD法によるイメージの測定, 川島書店, 1992
- 5) 森田チエコ, 西田恭仁子他: 看護学生の専門職業的態度の形成に関する研究 - 1 看護の興味と学習意欲 -. 神戸市立看護短期大学紀要, 1: 53-64, 1982
- 6) 中野照代, 藤生君江: 看護学生の自己実現に関する研究. 日本看護科学学会誌 第12回日本看護科学学会講演集, 12: 3: 18-19, 1992
- 7) 細身明代, 大沢正子: 看護婦自身による看護婦イメージと適応感. 神戸市立看護短期大学紀要, 12: 47-58, 1993

参考文献

- 1) 田上美千佳, 中川幸子他: 看護大学生にみられる学生生活意欲とその要因について 第一報 - 入学時から卒業時までの継時的変化を通して -. 日本精神保健看護学会誌, 1: 19-27, 1992
- 2) 古庄しおり: 看護系大学生の「5月病」と social support networkの実態について. 日本精神保健看護学会誌, 1: 9-18, 1992
- 3) 梶田美和子, 西村千代子: 看護学生の意識と生活態度に関する研究. 第16回日本看護学会収録, 看護教育, 156-159, 1985
- 4) 二宮克美: 大学生の大学生活への適応と社会意識 - 質問紙調査結果の基礎的分析 -. 愛知学院大学教養部紀要, 41: 3: 77-112, 1994
- 5) 安藤秋人: 女子大学生の大学適応に関する研究(1) - 大学への動機づけ, 人格特性と適応との関連 -. 武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編, 37: 123-135, 1989
- 6) 中野智津子, 黒田公子他: 職場適応に関する縦断的研究 - 看護実践における職場のサポートと自己評価でみる新卒看護婦の3カ月の変化 -. 神戸市立看護短期大学紀要, 13: 205-212, 1994